

被爆の証言

今から74年前、12歳の少年が被爆し、多くの幸運に恵まれて現在迄生き残っています。
その被爆の実態についての証言をすることを広島平和文化センターのスティーブン・リーパー理事長にお話いたしましたら、広島平和記念資料館から多くの画像を提供していただき、出来るだけ多くの方々に伝えていくよう励まされました。それ以来、次世代の方々を中心に実施して参りました。この度千田町1丁目の方々にお話する機会を頂き感謝しています。全文をここに掲載させていただきます。

・戦争が普通の家庭を壊していく

昭和20年（1945）になると、B29という大型爆撃機で日本の主な都市は次々と空襲を受けるようになってきました。

私達一家は中区千田町3丁目(御幸橋西詰)に住んでいて、住居兼事務所の平屋建て住宅の奥が住まいでした。



あき書房より購入の復刻版地図

(昭和14年版)

赤いマークの上空600mで原爆破裂。

その上の黒い部分は大本営、憲兵隊本部、陸軍練兵場)

右下の緑のマークが私の住んでいたところ。

(千田町3丁目)

●が爆心地 ●が被爆地
(爆心地から2Km)



御幸橋西詰（上記の●右の橋）での被爆直後の風景

私はこの写真のごく近く（約50mほど南西）で被爆。

原爆資料館から借用（転載許可済）

撮影：松重美人氏

所蔵：中国新聞社

木材商を営んでいた父は、昭和20年頃には男子社員さんは兵隊に、女子社員さんは被服廠へ徴用されて、普通の商売は出来ないような状況になっておりました。この頃の父は消防団という組織に入って、焼夷弾攻撃を受けたときの消火訓練ばかりやっておりました。

私の家族は5人家族で、父母と12歳の私、7歳の妹2歳の弟の5人でした。

昭和20年になって、身重の母と弟妹たちは広島から30Kmばかり離れた佐伯郡平良村（現・廿日市市上平良町）というところに疎開し、父と旧制中学に入学したばかりの私の2人だけが広島の自宅に残ることになりました。



町内での消防訓練の様子（バケツリレー）父はこれ以外に手押しポンプでの訓練をしていた。

原爆資料館から借用（転載許可済）

提供：田中美智留氏

7月には呉市が焼夷弾攻撃をされ、真っ赤に燃える東南の空を眺めて、私はその恐ろしさを実感するようになり、次は広島だろう、と毎晩のような怯えた日々を送っていました。この空襲を見た時から、空襲は夜やられるものだと思います。

20年に入って、私達より下のクラスは集団疎開をし、私は20年3月に千田国民学校を卒業して旧制広島市立中学校（現・基町高校）へ入学したものの、授業は殆どなく軍事訓練といって、わらで作った人形を敵兵と見立てて竹槍で突く訓練をしておりましたが、その訓練も長くは続かず、動員になりました。その動員とは、6月頃から陸軍の命令で焼夷弾攻撃を受けた場合、類焼を防ぐために幅約100mの空き地を作ることになり、そこに建っている家屋を強制的に退去させ、その家屋を私達学生や市民が綱をかけて皆で引っ張って壊し、その廃材の後始末をする作業のことで、それに駆り出されるようになりました。

・作業場所

私達の作業場所は小網町（土橋電停の近くで爆心地から約600m）で陰一つない炎天下でした。この炎天下の作業は上半身が半袖シャツ、下半身は長ズボンにゲートルを巻き、戦闘帽という草色のキャップを被って作業していました。

12歳の少年にとっては非常にきつい労働でしたが、「頑張りましょう、勝つまでは」「神国日本は神風が吹く」の合言葉を信じて毎日まじめに作業に従事していました。



資料館より借用。（掲載許可済）

アメリカ公文書館所蔵

下部の白線部分が類焼防止の為に、強制疎開させられた家々を壊した部分で、多くの市民がここで被爆した。●部分が作業場（幅、100m）

・楽しい魚釣りとう豆腐（原爆投下の前日）

学校は勿論、家でも勉強は一切せず、作業に出かけた日は寝るだけ、休日は模型飛行機を作るとか、魚釣りするとかの遊びばかりでした。

近所に上田正之くんという国民学校時代からの親友がいて一緒に通学し、一緒に魚釣りをして遊んでいました。

前日の日曜日 8 月 5 日(原爆投下の前日)はよく晴れた日曜日で、父は相変わらず消防団の訓練で一日中留守、私と上田君は御幸橋でハゼ釣りをしていました。当日もよく釣れました。

実はその豆腐は腐っていて、その夕方からお腹が痛み出し頻繁に便所に通うひどい下痢になりました。後で聞いた話ですが、腐った豆腐によるフトマイン中毒と言ってひどい下痢を起こす病気だそうです。この豆腐が私の人生を変えることになります。

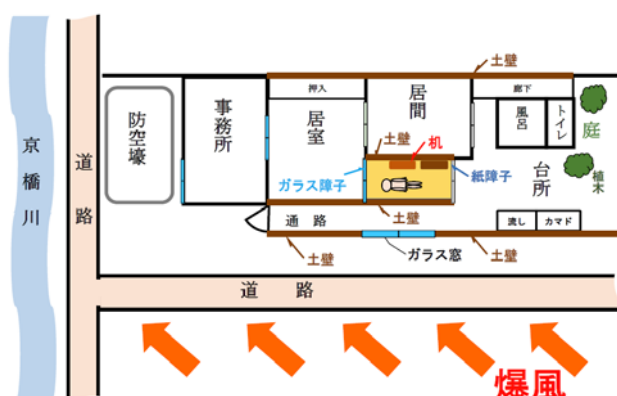
ごろごろという腹痛と便所通いの辛い一夜が明けて翌日、親友の上田君が誘いに来てくれましたが、朝になっても下痢は止まらず、このまま作業現場に行っても作業場に便所は少なく、仕事にはならないから入学後初めて学校を休むことにしました。



原爆資料館から借用(転載許可済)

私の家は木造の平屋建てで、私はその家の 3 畳の小さな部屋に勉強机と本棚を置いておりまして、その机の横に布団を敷いて寝ていました。北側も南側も土壁、東側がガラスの障子、西側が紙の障子でその向こうが土間の台所でした。

上田君と別れて40分ほど経った8時15分、今まで経験したことのない、強烈な閃光（目がくらむような真っ白な閃光）が台所の方で光り、ほぼ同時にドカーンという耳を劈くような爆発音（鼓膜が破れるような大きな音）とともに、物凄い爆風が北西側から吹いてきて、東西両方にはまっていた紙障子もガラス障子も壊れて吹っ飛んで来ました。また北側の壁が私の方に倒れてきました。



黄色の3畳の部屋に寝ていた。

夏でしたのでパンツとランニングシャツ1枚で寝ていた私の体の上に壁土や瓦がどさどさと落ちてきました。先ほど警戒警報は解除されたのでB-29はいない筈なのに、何が起きたのだろう。でも物凄い閃光と爆発音と爆風はただ事ではない。多分ごく近所に大型の爆弾が落ちたのだろうと思いました。

もう少し詳しく状況をお話します。

爆風で紙障子もガラス障子も吹っ飛んでしまい、爆風の上流側にあった紙障子の破片や台所の器具などが飛んできました。それと同時に北側の土壁が私の上に倒れてきました。その恐ろしさ、初めて経験する物凄い恐怖。だが幸いなことに、その土壁は傾いた私の勉強机（後ろが土壁だったので吹き飛ばなかった）と反対側の土壁で止まってくれて、私の体はその隙間にいたのです。横になって寝ていたので体も吹き飛ばされずに済みましたし、飛散物も大きなものの直撃は受けずに済みました。もし机が完全に潰れていたら間違いなく土壁で圧死していましたが、ただ歪んだままで土壁を止めてくれていました。



日赤病院の壁に刺さったガラスの破片跡

日赤病院の展示物を撮影

倒れてきた瞬間、真っ暗になり、何も様子が分かりません。外に出ようとしたが這い出る隙間はありません。被さった土壁は押しても身動きもしません。

そのうちに父が助けに来てくれるだろうと待つことにしました。しばらく待っても父が帰ってくる様子はありません。

その時かすかではありますが人々の悲鳴や助けを求める声が耳に入ってきました。と言うことはひょっとすると父も死んでいるかもしれないと思い始めました。

・倒壊家屋からの脱出

埃と土で真っ暗だし、自分がどうなっているかも分からないし、このまま父の助けを待っていても父の生死は分からないし、生きていたとしても大怪我をしているかもしれないし、町内の人たちを助けているので来られないだろう、消火に精一杯かもしれないと思うようになってきました。何とかして自分で外に出たいと真剣に思うようになりました。

でも顔も体も土壁で覆われているし、身動きが取れない状況なのでいろいろ方法を考えていましたが思い浮かず、でも何とかしなければと思い、左手を動かしていると壊れた机の引き出しが外れて落ちて来ていて、それに触ったのです。よし、この中には何かがあって役に立つかもしれないと思い、引き出しを探っていたら、その中に切り出しナイフ（模型飛行機用に使っていたもの）があったのです。よし、これで何とかしてみようと、鞘を抜いてそれで被さっている土壁をえぐり始めました。

当時の壁は竹を割って縄で括ってその上に土を塗って作る「こまい」という方式だったので、ナイフで切れると思いましたが、縄は簡単に切れますが竹はなかなか切れません。でも削ることは出来ます。がむしゃらに削り込んで行きました。

何とか手が動かせたということは非常に幸運なことで、がむしゃらに竹を削りましたが、そのたびに壁土が顔に落ちてきて目や口の中に入ってきます。でもそんなことは問題ではありません。必死です。

まず土を落とし、こまいの縄を切って、竹を削ったら、その上に瓦があつてなかなか外が見えません。とにかく続けるしかないの、上向きの手で竹を1本きり、2本きりしているうちに、何本か切れていって、折り曲げ、瓦を割っているうちに外が少しずつ見えてきました。

当日は晴天だったのに外は薄暗い。少しずつ穴が大きくなってきました。体の回りに埋まっていた壁土や瓦を外に投げ出していくと、少しずつ体が動きやすくなってきました。

有難いことに大きな梁や柱は私の体の真上から外れていました。よしこれなら出られるかもしれないぞと自信を深めて必死で壁のこまいの竹を削り折り曲げていったのです。



壁のこまいを手で破って下敷きになった娘を助けようとする母、でも手だけでは壁は破れません。この子はそのまま焼け死にました。

原爆資料館から借用（転載許可済）

作者：香川千代江氏

かなりの時間が経っていたでしょう、直径が40cmくらいの穴を開けることに成功し、体の回りの土や瓦を外に出して空間を作り、顔を出して外を見ました。何と隣の家もぺしゃんこです。私の家の上に被さって来なかったのは、両家の間に6mくらいの斜面道路(舗装なし)があったからで、もしこの道路がなかったら私を閉じ込めた土壁の上に隣の家が被さって多分私は出られなかったでしょう。

穴を大きくしながら外に出たのは正確な時間は覚えていませんが、爆弾が落ちてからかなりの時間が経っていたでしょう。薄暗いのは曇っているのではなく、きのこ雲の真下だったのです。出てみると市内の中心部は真っ赤に燃えています。

この雲と火を見たとき自分の家の近くに爆弾が落ちただけではなく、市内全部にわたって爆弾や焼夷弾が落とされたのだと思いました。もちろんそれが原子爆弾だとは夢にも知りませんし、そんな物凄い爆弾のあることも知りませんでした。

手足や肩などに出る時に負った切り傷で出血していましたが、深手の傷はありませんでした。



火の海の広島市内、この写真は私が西広島に着いたころの絵です。

原爆資料館から借用（転載許可済）

作者：高原良雄氏

・助かった理由（何故外の出られたのでしょうか。後になってからの考察です）

- ・爆風が来る北側にはガラス窓がなく、ガラス片が飛んで来なかったこと、（上流側にガラス窓があったら無数のガラス片が体に刺さって出血多量で死んでいたでしょう）
- ・横になっていたのも木片などの飛来物の直撃を受けなかったこと（座っていたら木片などの飛来物で大けがをしていたでしょう）

- ・土壁だったので吹き飛ばされなかった、机と下流側の土壁のおかげで支えられて上流側の壁や柱や梁が止まって、隙間があって、ある程度体を動かせることができたこと、
- ・引き出しが上手く壊れてくれていて、その中に切り出しナイフがあったこと、などなど多くの幸運が重なったことです。今でもこの幸運に感謝を忘れたことはありません。

・生き地獄(目を背けたい生き地獄なので今でも身の毛がよだつ光景です)

やっとの思いで外に出ました。これから見る光景は何と生き地獄です。地獄と言う言葉は知っていました。キリスト教でも仏教でも現世で悪いことをした人間は地獄に落ちる、と教えられてきました。それは多くの画家が天井画や壁画で表しているように鬼がいて、ひどい目にあう絵を本で見ていたのを思い出しておりました。親から「嘘をつくな」「お国のために役立つ人間になれ」と教えられていましたので、これに背かないと地獄に落ちることはないと思っていました。

外に出た私の姿はランニングシャツ1枚とパンツ1枚で裸足です。

手や足や肩などからは可なり出血（穴から出る時に竹のささくれでひっかいだもの）していますが深い傷ではないので、父のことも心配だけど、父の生死は分からないし、生きていたとしてもどこにいるか分からないので、とにかく母や弟妹たちがいる平良村へ逃げようと決心し、西のほうへ向かって歩き始めました。

市電の走っている広い道路に出て南大橋と言う木造の橋に向かいました。そこまで約200mくらいですが、狭い道路は倒壊した家屋で歩けません。広い道路を選んで歩き始めました。何と惨たらしい光景でしょう。天井画に書かれていた地獄絵など比較に成らない惨たらしく苦しむ人たちが沢山いるのです。（私の網膜に映っていて消えない光景）

- ・髪の毛は熱線で焼けて縮んでおり、衣服の無い所は焼け爛れて皮膚が垂れ下がって顔は黒く膨れ上がり目の辺りから血が流れている。しかし肉親を探しているのでしょうか、ふらふらと歩いている人。何も声をかけてきません。
- ・全身焼け爛れて動けなくなっている人。水をくれと小さな声で言っています。
- ・体中にガラスの破片が刺さって血まみれになって倒れている男性。もう動けなくなっています。
- ・衣服は千切れ、衣服の無い皮膚は火傷だらけで皮膚が垂れ下がっている女性が、その手で乳飲み子を抱えてしゃがみこんで水を求めています。私の方を向いて水、水と言いながら水を欲しがるしぐさをしています。私には上げる水もないし、何もしてあげられることも出来ません。「兵隊さんと呼んできます」と声をかけて探しましたが、付近にはそんな人はおりません。結局、この女性には何もしてあげられなかったのです。今でも何もしてあげられなかった後悔の念は私の頭から消えません。
- ・歩いているときに倒れてきた土塀の下敷きになったのでしょうか、即死している女性、黒く長い髪の毛と頭半分だけが見えています。
- ・倒れた家屋の下敷きになって助けを求めている男性、その下側に血が滴っているが太い柱の下敷きなので身動きが取れません。道具もなく助けようがありません。
- ・倒壊した家の下から動かない青色の手だけが見える。
- ・髪の毛は焼けて縮み、顔は黒く爛れて腫れ上がり、上半身もシャツが破れて皮膚は垂れ下がっている、その上目が見えなくなっているのでしょうか、方角がわからずに「助けて、助けて」と小さな声で呻きながら助けを求めている少女。橋の方へ連れて行こうとしたのですが火傷など重傷で導く手が差し伸べたものの本人が動けません。
- ・焼け爛れて皮膚が垂れ下がった人は男女の区別さえつかないような惨さです。

倒壊家屋から脱出するときに負った傷で出血しているし、下痢が続いている12歳の少年にこんなに多くの重傷者を助けてあげる余裕も体力もありません。しかしこの人たちを助けられなかった後悔は私のその後の人生に重い十字架として付いて回ります。

南大橋の近くに近付くと二人の少年が歩きながら水を探していました。

- ・顔が火傷で黒く膨れ上がって右手の皮膚が垂れ下がって水を求めている少年。
- ・顔は膨れ上がり両手の衣服の無い部分の皮膚は火傷で垂れ下がっているが、まだ元気がある小学生が水を求めている。

多くの人が水を求めていましたが、この二人は火傷の手で私の足を掴んで離しません。
何とか水を飲ませてあげたいと思い、一緒に防火水槽を探しました。



ぼうふらの湧いた防火用水の水を飲む少年たち。

原爆資料館から借用（転載許可済）

作者：小野木明氏

水道は止まっているので、防火水槽の水を飲むしかありません。

戦争中は焼夷弾が落とされたときに初期消火をする為に玄関先に酒用の4斗ダルとかセメントで作った四角の水槽のような入れ物に水を汲んでいました。

先ほどの水を求めていた少年は私が手を取って近所の防火水槽を探しましたが、殆ど倒壊した家の下敷きになっていて飲めません。

1箇所見つけたので飲もうとしたら、ぼうふら（蚊の幼虫）が沢山わいていて飲めそうにない水だったのですが、その少年は二人ともその水に焼け爛れた顔を水に浸けておいしそうに飲んで、そこでうずくまってしまうました。「早く逃げないと火が回ってくるよ」と言ったのですが、その少年はもう歩く気力があまりありませんでした。



南大橋近辺の土手に集まった被爆者が水を求めている。

原爆資料館から借用（転載許可済）

作者：原田義久氏

歩いて歩いて同じような負傷者や死体ばかり、南大橋のふもとで火傷はしていないがお腹に深い傷を負った年配の女性が出血する傷口に手を当てて、やはり水を求めていたので、手を引いて雁木を使って南大橋のふもとに下りて、元安川の水を飲ませたら、おいしそうに飲んでそこで横たわってしまいました。

一緒に逃げましょう、と言ったのですが、彼女はものを言う元気もなく、早く逃げなさい、と言って座り込んでしまったので、私はその女性をそのままにして、南大橋の上に出ました。

木造の橋の欄干は吹っ飛び、橋の上には多くのけが人や既に息絶えた人が沢山います。

橋や川岸は火から逃れる当面の避難場所だったのです。血は出ているものの普通に歩いている私を見て助けを求めてくる人、水を求める人などが沢山います。

ひどい負傷者（火傷や怪我）があまりにも多いし、自分も出血があるし、下痢便を垂れ流しながらの私にはこれ以上何もしてあげられないまま橋を渡りました。この多くの負傷者に何ら手を貸すことも出来ず渡ったときの気持ちは一生私の脳裏から離れることなく人生を歩むことになります。

下の元安川には木片などと一緒に死体が流れていました。この時既に市内の北のほうは真っ赤に燃えていました。私の恐怖心は極地に達していました。とにかく早く市内から脱出しないと自分も焼け死んでしまう、大火傷をした負傷者も怪我をした負傷者も火から逃れるため、川に飛び込んだ人は沢山いたのだと思います。逃げ歩いている私も裸足なので道路や瓦礫の上を歩くのに熱くてたまらないし、歩いている間にガラス片や木片が足の裏に刺さって痛くてたまらないのです。

吉島町を抜けたところで、雁木を使って川の中に入って足の傷を洗って冷やし、刺さったガラス片や木片を抜いて、そのまま本川を対岸まで泳いで渡りましたが、泳いでいる途中で死んで流れている死体とぶつかるのです。でも有難かったのは、泳いでいる途中、流れていた片方の下駄を掴むことが出来、それを大切に持ってやっとの思いで、江波の雁木を登って歩き続けました。

火の手を逃れて川に飛び込んだ負傷者も沢山いましたが、助けてあげることは出来ません。泳いだことで体が冷えて大分楽になりました。先ほど話したのと同じような、大火傷をして皮膚が垂れ下がって助けを求めている人、血を流しながら黙々と歩いている人、火傷はしていないが腹部から内臓が出ている男性、逃げるのを諦めて呻きながら蹲っている人だらけです。



8000度の熱線で一瞬に焼け爛れた男性。

原爆資料館から借用（転載許可済）

撮影者：尾藤政美様

私在家から南大橋迄の200mの間に見た光景と同じ光景、いやもっとひどい光景が市内のいたるところで溢れていました。助けや水を求める叫び声が唸りのように聞こえ、蹲って動く力を失った人たちの絶望の呻き、動けなくなった老人を背負って最後の力を振り絞ってとぼとぼと歩く人、その人も血だらけです。特に橋と川岸は格好の避難場所として、多くの避難者が集まって来ていました。

観音町まで来た時、多くの負傷者の中に、すでに亡くなったお母さんに子供（1歳半くらい）が寄り添っている姿に出会い、見るには耐えられず、私はその子を抱き上げて助けてくれる人を探しましたが健全な人は居りません。

大きな声を上げて助けを求めて歩いていると、川の中州で顔から少し血を流しているものの火傷はしていない女性が多くの方々を介護しておられるのに出会って、お願いしたら抱き上げて下さいました。私はその方に子供をお願いして再び歩き始めました。（この子だけが私が助けたと感じている唯一の人です）

私はこのような地獄の中を負傷者に手を貸すことも出来ず、懸命に西へ西へと歩きました。

裸足の足の裏は傷だらけになって、これ以上歩けないような状況になりましたが、じっとしていれば火の手が回って焼け死んでしまうので、拾った片方の下駄を頼りに懸命に歩きました。もうこの時点ではどんなに人が助ける体力も余裕も完全に無くなっていました。泳ぐ元気もありませんでした。

西大橋はあまりにも多い負傷者や死者が群がっておりませんでしたので、渡る隙間がありません。止む無く火災が迫っている方向である北側に向かって近づき、市電の鉄橋を渡って、やっとの思いで西広島（己斐）の市電の駅付近にたどり着きました。



西大橋は死者と負傷者で渡れなかった。

原爆資料館から借用（転載許可済）

作者：森孝人氏

宮島街道に出た時、やっと火の手の心配がなくなったので「助かった」という思いが込み上げてきました。市内の方を振り返って見ると大きなきのこ雲がむくむくと上がっており、一面は火の海でした。

でも、足の裏が傷むのと熱いので馬車かトラックに乗せて貰いたかったのですが、どの移動体も重症のけが人や死体で満杯です。それどころか大火傷をした負傷者も黙々とわが家へと歩いています。それを見て私は歩く決心をして、痛み堪えてひたすら西へと歩いて、やっとの思いで、約30Km離れた平良村の母たちの疎開先にたどり着いたのは夕方薄暗くなっていました。



火傷と怪我をしながら自宅へ帰る負傷者

原爆資料館から借用（転載許可済）

作者：初谷忠男氏



被爆直後の相生橋周辺

原爆資料館から借用（転載許可済）

作者：資料館

・お母さん！お母さん！

父と私の安否を心配していた母は私の顔を見るなり大粒の涙を流し、すぐ傷の手当をしてくれました。父のことや市内のことを尋ねられましたが父のことは知る由もありません。町の様子はつぶさに話したら、母の顔色が青ざめて行くのは忘れられません。

父はその夜中、多くのけが人を馬車に積んで廿日市の負傷者収容所に下ろしたあと、私達のところへ帰ってきました。けが人収容所には私は行っておりませんがまさに悲惨な場所だったと聞き及んでいます。

父は、火傷はしていなかったが右腕に可なり深い傷を負っていて巻いた布切れが血で真っ赤になっていました。父は閃光にはあっておりませんが、消防車（手押しの消防車）の車庫と一緒に10数メートル吹き飛ばされ、その時に飛んできた小屋の破片で負った傷だそうです。怪我はしたものの家族全員生き延びられたことは奇跡に等しかったのです。

運よく生き延びたものの、逃げる間に浴びた放射能(外部被爆)による影響がどれほど恐ろしいことかこの時点では全く分からなかったのですが後になって牙をむいてきます。(後述)

・伯父さん！痛いでしょう

父は傷の手当てでもそこそこに、翌日も燃え盛る広島市内へ負傷者の救済に出かけました。先ほど話した強制退去させられた空き家の取り崩しには学生だけではなく、一般の市民も狩り出されていました。

私の伯父（父の兄）も市内の中心部（十日市町、爆心地から500m）で被爆しました。伯父は大火傷をしましたが目が見えたのと火傷以外の大怪我がなかったので、何とか舟入町の自宅にたどり着くことができていました。伯父の家も焼失を免れたのですが破壊されて住むことは出ない状態でした。家に着くなり「聡子、聡子」と2歳の娘の名前ばかりを叫んでいたらしいです。歳を取ってから授かった娘の安否を確かめたいばかりに、全身の力を振り絞って帰って来たのでしょう。伯父の家族は半壊の家で何とか助かっていたようです。

父は木材を運ぶ馬車（馬車は持っていましたが馬はどこかに吹っ飛んでいなくなっており、同業者に無理やり頼んで馬を借りて）で伯父一家と伯父以外の多くの負傷者を乗せ、伯父以外を廿日市の負傷者収容所で下ろし、伯父一家を平良村に運び込みました。

伯父の顔は真っ黒に腫れ上がり腕の半分の皮膚は垂れ下がり赤身が出て触れると痛がったようですが、部屋がないので、農家の納屋を借りて藁の上に布団を敷いて寝かせ、チンク油といって酸化亜鉛を油に溶いた白い火傷の薬（父が陸軍に納品していたので軍から貰っていた）を塗ると痛がるので垂らしてあげたりしましたが、顔は黒く膨れ上がるばかり、火傷の面積が広いので声も出しにくく、「長崎もやられたのか、日本も終わりだな」と言う言葉を最後に8月10日に息を引き取りました。

負傷者収容所で親族とも会えずに亡くなった人たちと一緒に伯父も入れて貰い、陸軍がそれらの死体を焼け跡に集めてガソリンをかけて焼却し、焼けた瓦の上に少しずつ遺骨を盛っているのを頂いて帰りました。（誰の遺骨か分かりませんが、それを伯父の遺骨として祀っています）

・上田君の最期

私を朝誘ってくれた親友の上田君は爆心地から直線距離で600mの小網町と言うところで被爆し、大火傷を負って福島町（爆心地から900m）まで逃げ延び、そこで親戚の人に助けられましたが、「お母さん、お母さん」と叫びながら8月8日に息絶えました。

ご両親も被爆され、上田君を捜しにいけませんでした。小網町へ勤労働員に狩り出された1年生は全員死亡。むごい死に方で、原爆資料館に展示してある上田君のゲートルを巻いた展示品(三位一体)の前に行くと、今も胸に迫って自然と涙が出てきます。



三位一体

3人の中学生の遺品で作られたもの。
ゲートルが上田君のもの。

原爆資料館から借用（転載許可済）

寄贈者：上田キヨ氏（上田君の母親）

・中村君何故生きているの？

父からは「広島に投下された爆弾は特殊なもので、今から70年は人が住めないから、市内に入ってはいけない」と強く言われていましたが、学校のことや自宅のことや友人のことなどが心配だし、伯父の死を見届けたので、市内の大火がほぼ収まった8月11日に父と一緒に市内に入りました。まず私が下敷きになった家に行ってみました。

火災は20m先で止まっていて崩れた家はそのまま残っていたのです。よくこんなひどく倒壊した家から抜け出せたものだとの自分の幸運に手を合わせました。

でも、家財などはどこかに吹っ飛んでしまったり潰れたりして、何も取り出すことは出来ず、防空壕の中のものカビだらけで食べられそうな食品はひとつもありませんでした。

その時、上田君のご両親と会ったのです。「中村君、何故生きているの？」この言葉はあの生き地獄の光景と同じく、生涯忘れることが出来ません、心にジーンと来る言葉でした。

上田君が亡くなっていることはほぼ想定出来たので、「死に目に会えましたか？」と尋ねたいところですが、言葉が出ませんでした。逃げる途中に見た地獄のことが脳裏に残っていましたから。「あの日、上田君が誘ってくれたけどひどい下痢をして欠席したんです。」と言うのがやっとでした。ご両親のあの粒の涙は今も私の脳の中に溜まっています。

・生き残った苦しみ

それ以来、どうして自分だけがこのこ生き残っているのだろう、いつそ一緒に死ねばよかった、苦しむ人を助けることも出来ず、自分ひとりが生き残ってと、後ろめたい気持ちと申し訳ない気持ちに苛まれるようになりました。この思いは最近までずっと続いていました。さらに追い打ちをかけたのが、被爆者と結婚すると異常者が生まれる、という誤った噂が公然と流れるようになったことです。それ故、私は生き残り被爆者であることをひた隠しに隠して来ました。弟妹にも友人にも。

・被爆者との結婚

説明が前後しますが、私は被爆者であることを隠したまま、伯母（亡くなった伯父の妻）の勧めで、同じ千田国民学校の同級生と結婚しました。相手が被爆者であることも知りませんでした。結婚後どちらからともなく両方が被爆者であることが分かり、生まれてくる子供の安否がとても心配でしたが、結果として普通に生まれてくれました。神仏に感謝です。

・伝承の義務

対外的には被爆者であることをずっと隠してきましたが、被爆60周年の時に、生き残った者の使命は、二度と同じ地獄を作らないためにも被爆体験を語り継ぐことによってこの世の中から原爆や戦争を無くすことだと思い直し、被爆の証言をするようになりました。多分神様が「お前はわしが皆さんに奉仕するために生かしたのだ」と言っておられるような気持ちになったからです。

被爆60周年の年にNHKの取材にも応じました。NHKの録音室での録音の時は普通の声が出せたのですが、資料館の中の上田君の遺品の前での取材には、涙が出て声が震えて取材になりませんでした。

NHKアーカイブス(ラジオ)では今でも私の声で聞くことが出来ますが、この声は録音室でのものです。

<http://www.nhk.or.jp/peace/radio/>

（現在は聞こえません。2019年8月6日の中国新聞の内容と記事と同じ）

・後遺症との闘い

原子爆弾による後遺症は広島と長崎、第5福竜丸の3つだけですが、原子力発電の事故によるものはアメリカのスリーマイル島、旧ソ連(ウクライナ)のチェルノブイリ、福島第一原発などがありますが、放射線による後遺症はとても恐ろしいものです。昭和18年1月に生まれた佐々木禎子さんという少女が被爆して白血病になり、治癒を信じて死まで折り鶴を折り続けるお話は千羽鶴として語り継がれています。

私は通っていた市立中学校では顔を出すまで死んだものとして処理されておりました。ほとんどのクラスメートが無残な死を遂げた学校にそのままのこのこと籍して2年生に上がるなど自分の気持ちとして許されることではありませんでした。

終戦後、疎開先を出たので住む家もなく、今まで通っていた広島市立中学を正式に退学し、家族が住むための掘っ立て小屋の材料集めや水汲みなどに専念しました。20年の秋に父が千田町3丁目の半壊の家を市の斡旋で購入し、修理して住みはじめました。何とか雨露がしのげるだけのボロ屋でしたが、住める家があるだけで有難く、翌年の3月に私立中学校（修道中学校）を受験し再び1年生として再出発しました。そのころから髪が抜け始めました。



被爆後の相生橋周辺
原爆資料館から借用（転載許可済）



被爆後の原爆ドーム周辺

資料館から借用（転載許可済）



被爆後の焼け野原、向うに見えるのは似島
（ここに多くの負傷者が収容された）

原爆資料館から借用（転載許可済）

校則で坊主頭に決められていたのですが、髪の薄い中学生は私以外にもいましたので、彼らも生き残り組かも知れません。お互い黙って認め合いました。甲状腺に異常（腫れ）が出たのもこの頃で、大した治療もせず、そのまま暮らしていました。長い下痢も始まりました。食料のないのと合わせて痩せさらばえていました。今振り返って、よく生き延びられたものと思います。

大学（広島大学工学部）の時代には肺結核で1年休学し、社会に出てからは皮膚がんの手術も2回にわたり受けました。8年前の皮膚がんは600平方センチも移植する大掛かりなものでした。がんの家系ではないのですが私だけが癌になります。父も癌だったのかもしれませんが、何も言わず昭和54年に亡くなりました。

・妻の被爆

妻は私が住んでいた千田町のすぐ隣の町である東千田町（爆心地から1.8 Km）で被爆しました。姉妹3人が登校直前の自宅にいたところで被爆し、幸いにも熱線に合わなかったので火傷がなかったのですが、家の下敷きになり妻と妹は何とか隙間から這い出すことが出来助かりました。

しかし一緒にいた姉は大きな梁の下敷きになって、身動きが取れなくて、「怜ちゃん助けて！」と言う声にも12歳の少女に出来ることではありませんし、誰も助ける手段も余裕もなく、呉工廠に勤務していた父がやってきたときには既に火の手が回って来て、「怜ちゃん、早く逃げなさい、焼け死ぬから」と叫んで、妻と妹と父を逃がし、自分はそのまま焼け死んでいました。

皆さん、想像してみてください。このむごたらしい死に方は身内だけではありません。多くの市民がこのような形で亡くなっているのです。妻の一番下の弟（当時2歳）は若くして白血病で亡くなりました。

妻はABCC（原爆傷害調査委員会）という米軍の作った民間施設で被爆者の時系列的な研究の為に血液などのデータを提供してきましたが、被ばくの影響を医学的にきちんと説明してもらったことは一度もありません。

・No More Hiroshima.

皆さん、戦争と言う殺し合いのために多くの人が苦しみ、亡くなりました。戦闘要員でない一般市民も空襲や原爆と言う攻撃により多くの命が失われました。

広島で言えば、8月6日を境にささやかな市民の生活は完全に破壊され、74年経った今でもその後遺症に苦しんでいます。今は平和な時代です。この平和は多くの犠牲の上に成り立っているのです。広島の平和記念公園の慰霊碑の前に次の言葉が刻まれています。

「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませんから」と。

誰の言葉でしょう。主語は誰でしょう。広島市民でしょうか、アメリカ軍でしょうか、多分「人類の言葉」ではないでしょうか。



広島平和都市記念碑
（原爆死没者慰霊碑）

慰霊碑の下に刻まれた言葉

安らかに眠って下さい
過ちは
繰り返しませんから

核保有国が持っている現在の核爆弾は、一発が広島に落とされた原爆の数百倍の破壊力があります。核大国はそれを数千発以上保有しています。

どこかの国が暴発して一発使ったら、核の報復合戦になり地球が人類の住めない星になることは皆認識し始めています。今こそ世界中から核爆弾を無くすために日本が果たす役割は大きいものがあると思っています。

私たちのような被爆者の証言も聞いて頂きたいのですが、私達が最後の語り部です。

少なくとも知った方々に広島原爆資料館を見るように勧めて下さい。私が次世代の方々を中心に語って来たのは、その方々が将来世界を動かすようになられた時、原爆の恐ろしさを知らしめてほしいからです。大きなうねりにしようではありませんか。

以上
2019年7月27日
中村 富洋